

21世紀のスーパースターはリニアモーターカーだ

21世紀の高度化・多様化社会を支える超高速の輸送機関として、いまリニアモーターカーに熱い視線が注がれています。宮崎の実験線ではすでに時速500kmの安定走行を達成し、さらに有人走行、複数車両編成による走行へと研究開発は着実に進み、実用化まであと1歩という段階までやってきました。

高速鉄道網の整備に対する関心は、わが国の新幹線の成功以来、世界的な高まりを見せ、フランスでは在来方式による時速270kmの営業運転を開始しています。また磁気浮上方式への関心も高く、特に西ドイツでは国を上げて取り組んでいるという実状です。

さて、近い将来、確実にリニアモーターカーは走り出しますが、その時日本はどんな変革を期待できるのか、その一端をかいま見てみましょう。

500km/hが社会構造を変える

開業から23年、東海道新幹線は輸送力の限界に近づいてきました。

中央リニア新幹線は、これにとって代わる超高速鉄道として21世紀のわが国社会を支える骨格となるべく、昭和48年11月に基本計画が打ち出されました。

この中央リニア新幹線は超電導磁気浮上方式を採用するもので、時速500kmという超高速で疾走するリニアモーターカーが、東京～大阪間を、なんと75分ほどで結んでしまうことになります。

この驚異的ともいえる時間短縮により、まず期待できる大きな効果として、現在首都圏に集中しすぎている経済機能、情報機能を京阪神圏と中京圏が分担できる可能性が強くなることです。これは、「第四次全国総合開発計画」がめざす“多極分散型国土づくり”を一層容易に実現するための重要な要素です。

さらに、新幹線施工ルートにあたる中部圏内陸部を、東京・名古屋・大阪の3大都市と結ぶことにより、沿線各地の開発・活性化とそれに伴う地方定住化が促進されます。これは、地方と



写真提供：(財)鉄道総合技術研究所

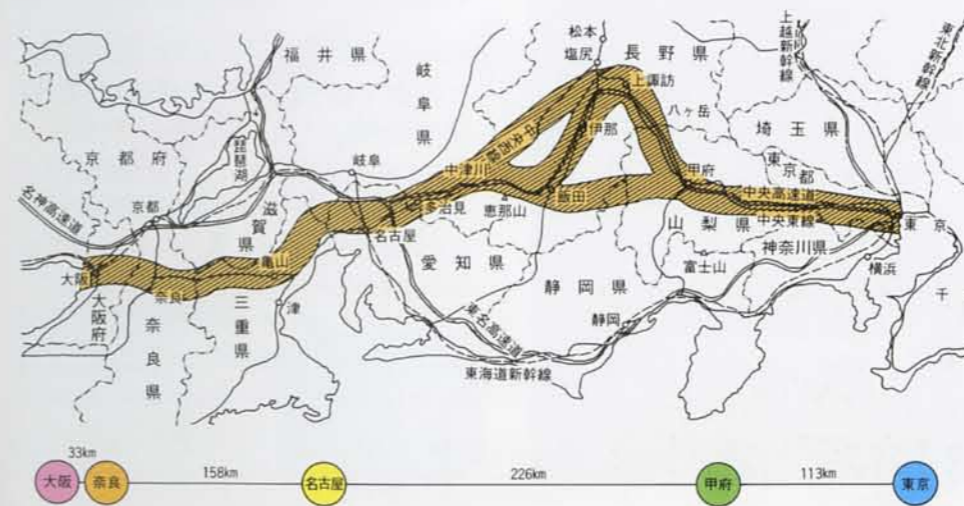
各国高速鉄道の速度比較

形式	国名	速度 (km/h)					備考
		100	200	300	400	500	
在来方式	日本		240	319			東北新幹線
	アメリカ		193	266			メトロライナー
	イギリス		200	257			H.S.T
	イタリア		200	248			
	カナダ		153				L.R.C
	西ドイツ		200	265			E.L
浮上方式	フランス		270	379			T.G.V
	日本(国鉄)					517	ML-500
	日本(HSST)			308			補助使用
	西ドイツ			365			TP-06

凡例

 営業列車の最高速度
 試験列車の最高速度

●中央リニア新幹線(東京～大阪)概要図



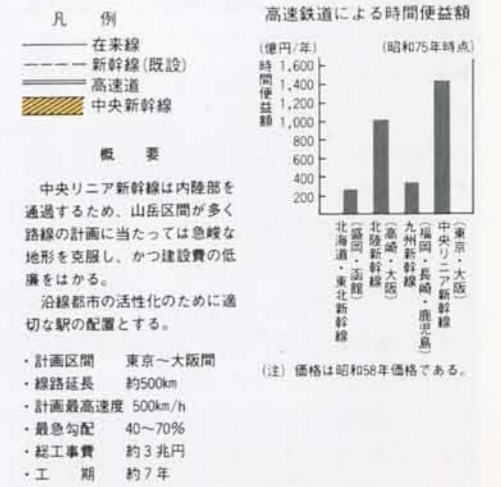
都市部のアンバランスを解消し、均衡のとれた国土づくりを実現するおおきな足がかりとなるでしょう。

24時間国際都市をめざす近畿の核、大阪

中央リニア新幹線は東京・山梨・長野・愛知・三重・奈良・大阪の7都府県にわたる全長500kmの新しいルートです。

このプロジェクトには約3兆円という膨大な工事費が投入されますが、建設に伴う直接需要のほか、他産業への誘発効果も出てくるので、全体として5～6兆円の規模に達すると予想されます。これにより沿線各地の経済活動は活発化し、ひいては日本経済の内需振興に大きく寄与することになります。

ことに大阪府の場合、中央新幹線の建設構想が現実のものとなれば、関西国際新空港プロジェクトもひかえているため、相乗効果は何倍にもなってあらわれます。経済・情報・文化の西の極として、また地球時代にふさわしい国際ターミナル都市として、大阪はいま大きな期待を背負って変貌を遂げようとしています。



資料：中央新幹線建設促進期成同盟会